

「少年の日の思い出」 読んだ読んだ 第五場面

この場面は、「僕」が良心に目覚めるのだが、ちようをつぶしてしまう場面。話を展開していくのに、「胸をどきどきさせ」という言葉を二回使っているが、同じ言葉でも、「期待する気持ち」と「盗みが見つかりはしないかと恐れ、不安な気持ち」の二つの心情をこちらがとらえられるように書いていてすごい。最後の一文から、美しく珍しいちようを自分の手で壊してしまったことへの悲しみがよく伝わってくる。 赤堀名美香さん

「僕」は、クジャクヤママユの斑点が見たいという欲望に負けて留め針を抜いてしまい、その後もこのちようを手に入れたという欲望に負けて盗みを犯してしまった。悪いことだが「僕」は大きな満足感により、我を忘れていた。しかしその後、低レベルな良心に目覚め、いけないことだと分かっているながら家まで持ち帰り、またエーミールの部屋まで戻ったが、クジャクヤママユはつぶれてしまい、何とか直そうと思ったが、もう後の祭りだった。 作者不明

「僕」は、エーミールからクジャクヤママユを盗んで、大きな恐怖感を感じた。その中には、罪悪感もあった。女中とすれ違ったときには、盗みがばれやしないかという罪悪感があった。しかし、ちようを壊してしまったときには、また違った罪悪感を感じている。自分の宝をつぶしてしまったのだ。これは、エーミールの持ち物なのに、自分の宝をつぶしているから、ものすごくショックが大きい。「僕」はこの場面で大きく心情が変化しているのだ。 伊藤雄一朗さん

「僕」は、最初にあのエーミールのクジャクヤママユを盗んで、満足感でたくさんだったけど、誰かが上がってくる音が聞こえてくると、クジャクヤママユを右手に隠して、だんだんと罪の意識が出てきて、罪悪感も出てきて、「僕」は自分が盗みを犯したことに目覚めた。くずれたクジャクヤママユを見ながら、「僕」は心の中で自分の罪を隠して、何事もなかったようにしておきたいという気持ちがあつて、「僕」はとても最悪な人だということが分かった。 浅野菜月さん

「僕」は、エーミールの部屋に入ってクジャクヤママユの留め針を抜いたときは、とつても気持ちが良かったと思う。「僕」がしたことは、盗みというとてもいけない行動なんだけど、「僕」にとっては、前からほしかったクジャクヤママユだから、盗みを犯したときは、多少のいけないという気持ちはあると思うけど、ほとんど自分の気持ち(欲望)しかなかったと思う。それを聞いたエーミールは、とてもショックな気持ちでいっぱいだった。 石原由大さん

「僕」のちように対する思いには、自分でもちようを盗むのはいけないと感じていたのに、盗みを犯してしまったときの「僕」の気持ちには、盗みをしてまでクジャクヤママユがとほしかったことが分かりました。良心が目覚めたとき、「僕」は、戻した方がいい、ばれたら噂が立ってしまうから元に戻そうとしたけれど、クジャクヤママユがつぶれてしまったら、迷ったり固まったりしたときの気持ちには、他のみんなに隠さなきゃと思つていて、あせつっている。 森 大成さん

「僕」は、してはいけないことだと思いつながらも、誘惑に負けて盗みをしてしまった。この宝を手に入れたという気持ちが強すぎて、罪の意識はほとんどなく、大きな満足感で心がいっぱいだった。しかし、女中とすれ違い、ばれる恐怖を感じた。そして、何事もなかったようにして、自分を守ろうとしたが、ちようはつぶれていて、できなかった。エーミールに対する罪の意識より、自分にとつての宝物を壊したことが胸に強く残つた。 安達麻衣さん

